

学会改革の継承を期待して



早 下 隆 士

新年おめでとうございます。昨年はBA5の蔓延により、ウイズコロナの状況は依然として収束とは言えない状況でした。しかしそのような中でも、茨城大学での分析化学討論会、岡山大学での分析化学年会は、実行委員会の皆様方の大変なご努力により、久しぶりの対面での開催であったことは、会員にとって大きな励みでありました。本部・支部の休止していた様々な活動も、コロナ禍で培ったオンラインもうまく活用しながら、活発に再開されることを切に願っております。

本年度は会長の交代の年でもあり、この2年間を振り返り、これまでの取り組みと課題について考えてみたいと思います。学会として一番大きな問題は、会員の減少に歯止めがかからないことがあります。まだ本会が9000名の会員だった時代感覚での学会運営から脱却を諮るために、2019年12月に(故)内山会長のもとで岡田前会長を中心とするタスクフォースが立ち上がり、その答申に従って会員数3000名でも運営可能となる学会改革を行って参りました。具体的には、1) 職員人件費の大幅削減、2) ぶんせき誌の電子化、3) *Analytical Sciences* 誌のSpringer Nature社への外部委託、4) *X-ray Structure Analysis Online* の廃止、5) 学術誌出版関係の株双文社印刷への一元化、6) アトラス社の新システムを利用した年会・討論会の自主運営と会員管理の連動化、7) 新会員管理システムによる会費徴収などが上げられます。人件費の削減には、徹底した本部業務のスリム化が必要でした。この改革のために会員の皆様にも様々なご負担をお願いし、ご理解頂いたことを会長として感謝致します。一方でぶんせき誌の冊子体配送の停止に伴い、気軽に会報を読めなくなった等の不満の声も頂きました。現在、デジタルトランスフォーメーション(DX)が進む中で、企業や大学では既にペーパーレス化が加速しています。我々会員もこのDXの波に乗り遅れず、普段から学会マイページを利用した情報収集、会報や本学会の学術誌を閲覧する習慣を身につけて頂きたいと思います。本学会の残された課題として、1) 本部の少人数組織体制の確立、2) 新会員管理システム運用の効率化、3) DXに向けた各種規定の見直し、があります。

会員減少の歯止めとなる取り組みとして、企業会員にも魅力的な学会となるよう産官学連携の促進に加え、退職を迎える会員の69歳までの会費の一括支払いで、恒久的な会員に就任できる「シニア会員」制度の早期導入の検討を進めています。また会長就任中に女性理事メンバーを増員しましたが、今後、女性に限らず、人種、国籍、年齢に捉われない多様なバックグラウンドを持つ理事を受け入れることが、学会の発展に多大なる恩恵をもたらすと考えています。

昨年も申し上げましたが、より積極的に会員の皆さんが参加したいと思う学会を築くことが会長の最大の使命です。絶え間なく困難な状況は続きます。しかしなお学会改革を緩めること無く継承し、歴史ある日本分析化学会の存続のために、会員の皆様、理事会構成員、および事務局の皆様のご理解とご協力を、どうぞ宜しくお願い致します。

〔Takashi HAYASHITA, 上智大学理工学部, 日本分析化学会会長〕